佐伯文庫公開展(中)

山本　保
（会員・佐伯市池船町）

公開展（佐伯市立佐伯図書館）に、次のような作品も展示された。

「司馬温公水がめをわる書画」　佐伯小学校所蔵

狩野派狩野由信（画家）の絵図に、佐伯藩八代寛龍公・高標自撰自筆（二十三歳）の書を額面にした作品。北宋の名臣・司馬温公が少年の頃、石を持ってみずがめを破り、溺死しようとしている子供を救ったという逸話（養正類編による故事）から取材しており、藩校四教堂に掲げられていた。

「四教堂」

逓信省（郵政省）航空局長・片岡直道の自筆を板額とした作品。

片岡直道は、四教堂教授だった高妻芳洲の孫にあたる方で、佐伯尋常高等小学校長高妻弘道（大正十三年～十四年）の弟で、片岡家へ養子入りされた。昭和十一年六月八日、片岡直道航空局長は、佐伯小学校講堂で、①人に親切であれ②虚栄心を捨てよ③数学を勉強せよ、と講話した。

「佐伯藩時代屋敷図」　佐伯図書館所蔵

明治四年頃の屋敷図。昭和八年米沢黄波製図。

「四教堂見取り図、平面図」　佐伯図書館所蔵

「毛利高標書の扁額」　養賢寺所蔵

寛政十一年端午の節句（五月五日）の二日前、清の張伯行（礼部尚書＝大臣）の著書”養正類編“の一文を自筆して四教堂学監・古賀五郎左衛門親克に与えた文書である。

「毛利高標の書」　広瀬信道氏所蔵

寛政九年（一七九七）春のころの自筆

遠物皆　遠隔の物は、皆重視し、
重近皆　手近なものは、皆軽視するものだが
軽鶏　鶏は、いかに立派なものであっても
雖有德　鶴には、遠く及ばない。
不如鶴
寛政丁巳春尽日　高標

鶴城の誇りを暗示した語であり、高標の心意気を示したものである（狩生熊義先生解読）

「毛利高標の書」　畑野浦・福泉寺所蔵

劉基　元末明初の人　進士

風駆
急雨
灑亭
城雲
圧軽
雷殷
地声
雨過不
知龍
去処
一池草
色万
蛙鳴

○韓退子・柳宗元・白楽天等は進士出身。但し李白・杜甫はそうではなかった。

○狩生熊義先生解読略す。

陸次雲評　先生真猶龍乎

○陸次雲
清・聖祖のころの大学者

「毛利高標の書」　畑野浦・前田家所蔵

題画

○狩生熊義先生解読略す。

芋屋府
清江
載疎雨
一経入孤
村花落
生春水
亭空江
自寒
落葉風
自掃
時有看
山人間来
座秋草

右朱朴

題田家壁

○狩生熊義先生解読略す。

十畝五畝
園三株
五株樹荷
鉏日暮帰
大吠門
前路

右　陳　鴻

「毛利高標書簡」　松下家所蔵
「四教堂の図面」　松下家所蔵
「三義井の一・啞泉資料」　松下家所蔵
毛利高標命名＝啞泉
松下筑陰（四教堂教授）の碑文

以上、佐伯小学校・養賢寺・福泉寺・松下家・広瀬家・前田家などの方々の御協力により、毛利高標の書と人がらを感得することができた。

この席をかりて、衷心より厚くお礼を申し上げます。

大郷信斉の「道聴塗説」より

佐伯侯（十代毛利高翰）その祖父（八代毛利高標）一代の蔵書数万に及びしこと、天下に隠れなし。

寛政年間、その書目（松下筑陰作成）を幕府に召され、爾来御用の節は、そのなかの奇秘を謄写せしめらる。

今年、それが中より三千部献上内願の通りたるべしとありければ、最初は、二豊（豊後・豊前）より下ノ関を越えて、山陽道八ケ国（長門・周防・安芸・備後・備中・備前・播磨・摂津）を上り、大阪へ着し、それより東海道と定め、おおよそ長持五十棹（トウ）、人足五百人と触れられけるが、通路の嶮岨、人馬のさしつかえ多しとて、道中奉行（書物奉行・明石大助）にも再三評議ありて、痛く荷物のかさを減省し、且つ佐伯城下の浦（西谷・角石－灘－ニガキノ鼻）より大阪まで（津久見－鳩浦－佐賀関－杵築－岩国領相浦－大洲領恕和島－芸州鮒崎－芸州糸崎－備後領鞆津－備前領日見浦－播州室津－播州兵庫－大阪）運送し、大阪入津の上、彼の地屋敷（佐伯藩大阪蔵屋敷）に於て長持十棹（前の計画では五十棹）、本馬二十駄に仕立て、東海道（淀川上り－伏見－大津－水口－亀山－桑名－鳴海－藤川－吉田－二川－浜松－金谷－府中－吉原－箱根－大磯－神奈川－江戸）を護送し、十月に及んで着府（佐伯藩・江戸屋敷）、昌平坂学問所へ向けて、これを納められるべしと聞ゆ。

献書の盛事、古今未曽有と称すべし。

（但し、宿泊地は推測による）

佐伯藩の財政を傾けるまで苦労して収集した佐伯文庫

を、何故無償で幕府へ献上するに至ったかの理由は、

① 幕府からの要請があった。

② 佐伯藩領内に、藩預りの天領（幕府領・日田郡代の管理下＝床木・柏江・津志河内・汐月・泥谷・西野・波越・石打・府坂・棚野など十か村二千石）の飛び地が散在して、とかく紛争が絶えなかったので、本とひきかえに、藩領に復帰したい。

という二説がある。

しかし、結果としては、幕府領の返還は実現せず、佐伯藩に対して賞詞とともに、葵の紋章入りの時服・馬具（鞍・鐙）を賜わったにすぎない。

この佐伯献書は、社会の一大美談として、当時の学界の注目を浴びる一方、幕府の処遇に驚き、世間の同情はこの小藩に集った。

そして、大阪の儒者篠崎小竹は、つぎのように述べている。

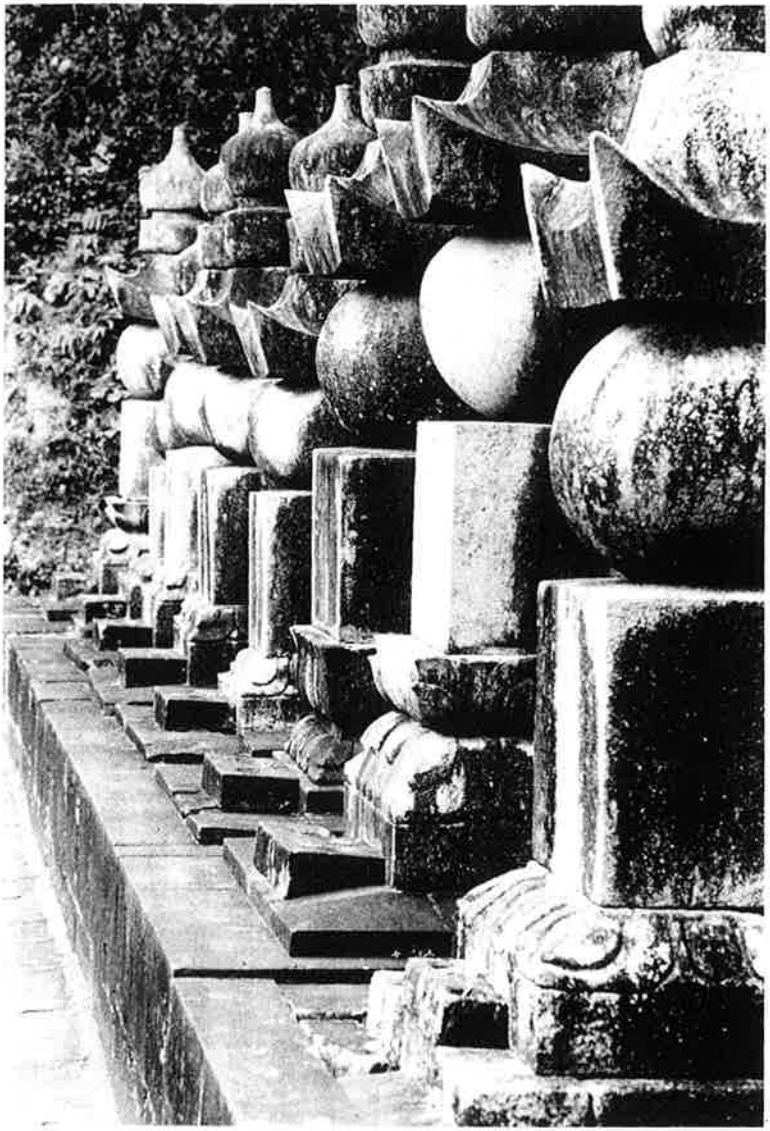
これは、豊後佐伯侯（毛利高標）の蔵書なり。文政十年幕府に献上す。幕府馬鞍一具を授与して、これにむくいるという。

侯（毛利高翰）の臣中島子玉（四教堂教授）、わたしに示すに、この献上書目（図書目録）を以てし、そのことを語るに、はなはだこれを惜しむに似たり。

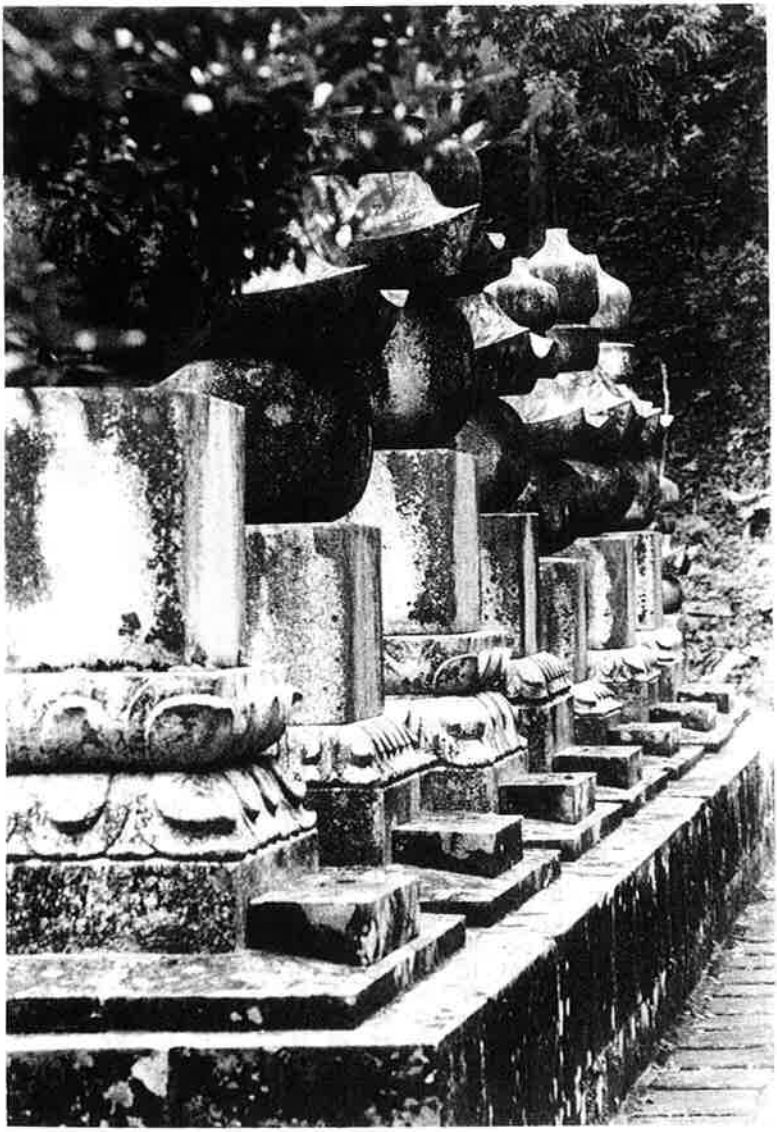
余曰く、

侯家（毛利家）、豈累生読書を好む人を産むを保せんや。その或は好まざれは、シミ散乱の患有らん。今官庫（幕府）に蔵めて則ち監護の職具わり、検目借覧せば亦外府（大名の役所）の如し。乃ち侯の献じて蔵せざるは、之を深く蔵する所似に非ざるか。

その結果は、篠崎小竹が指摘したように、献納せず佐伯に残った六万巻の本は、ほとんど散出亡失してしまい反対に献上した二万巻は、現在、国立公文書館・内閣文庫に一万二千百二十二冊、宮内庁書陵部・図書寮に四千九百九十九冊が、それぞれ優秀図書として、収蔵されている。



（毛　利　家　墓　所）
右端
八代藩主　従五位下
毛利伊勢守高標のお墓



（毛　利　家　墓　所）
左端
十代藩主　従五位下
毛利出雲守高翰のお墓